

九鬼周造全集

月報6
第5巻

1981年4月

目次

- 「日本詩の押韻」とマチネ・ポエチック……中村真一郎……一
九鬼哲字のもつ今日的意義……下店栄一……四
九鬼教授の思い出……アダ・レーヴィット……六
〈賞 料〉……ハ

岩波書店

東京都千代田区
一ツ橋 2-5-5

「日本詩の押韻」と

マチネ・ポエチック

中村真一郎

九鬼周造博士の「日本詩の押韻」という論文は、日本の貧しい詩学の歴史のうえで、劇的な業績である。

にも係らず、哲学者——それも博士の周辺のひと握りの同情者、あるいは崇拜者——が、それを博士の偶然論の一適用であるとして、専ら哲学的な関心を示したにとどまり、詩人たちのなかには真面目な関心は惹きおこさなかった。真面目に研究して評価したのは、戦争直後に押韻定型詩運動を行った、東京のマチネ・ポエチック・グループだけである。(ただし、同人の詩の大部分は戦前、戦時中に、既に出来上っていた。)

マチネ・ポエチックの仲間、専ら実作を発表するに急であつて、日本語で押韻が可能なりやという理論的考察は、博士の論文に任せたままであった。云うまでもなく、いかに理論が精緻であつても、実作が失敗してしまえば、押韻は有効ではないというこ

とになつてしまふのである。

マチネ・ポエチックの運動は数年にして止んだ。私を含めてその仲間は、活動の舞台を散文の領域に拡げて行くことになり、押韻の実験も中絶したままになった。そして当時を知る人は、その運動が詩壇のなかで、四面楚歌だった、ほとんど悪罵の声に埋もれて終った有様を、今も記憶しているだろう。しかし私自身の定型詩集も、その後、二度にわたって再刊され、又、『マチネ・ポエチック詩集』も、最近になつて三十年ぶりに復刊されて、また人々の手にわたるようになった。私たちの定型詩運動は、ようやく再評価の時期を迎えはじめたのである。

一方で、「日本詩の押韻」を含めた、九鬼博士の全集が、これまた刊行中である。興味のある者は、理論と実作とを並べて検討することが、容易に可能となったのである。

この時期に、実作者のひとりであつた私が、私たちの実作と博士の理論との関係について、一言、誤解を防いでおくことは、意味があるだろうと思う。

さて、当時、ある人たちが推測したように、私たちは九鬼博士の論文を読み、それに刺戟されて、実作を試みたのではない。私に関して云えば、戦前に二十歳の私はネルヴァリアンであり、彼

の『悪夢篇』を日本語に置き換えることで作詩の秘密を学んでいた。その場合、ネルヴァールの詩の最大の魅力は、あの陶酔的効果を持つ脚韻の響きである。それをいかにして日本語に移すかが、第一の問題になっていた。

その時、目のまえに手本としてあったのが、立原道造のリルケ風の無韻のソネットであった。それは音楽性において、同時代の他の詩人に匹敵するものはないほどの、恍惚感を捉えることに成功していたが、しかし、ネルヴァールを通して、ルネッサンスのロンサールなどのソネットに惹かれていた私には、立原の無韻十四行詩は、未完成に見えた。私は日本語のソネットに、イタリアのそれに近い脚韻を与えて、詩形としての完成を持たせたくなっていた。

一方、福永武彦はやはり当時、既にボードレリアンであり、彼にとっても『悪の華』を日本語に置き換えるということは、殆んど脚韻の問題に尽きていた。

そうして私たちは、青年らしい楽観主義に従って、和歌や俳句の伝統的作品のなかに、眠っている頭韻や脚韻の可能性を探り、そして次々と実作にそれを適用して行った。

九鬼博士の論文の存在を知ったのは、私たちの実験がかなり進展した後(恐らく戦時中)だったような気がする。私たちの小さなグループの外に、実作が手書きで流出しはじめた時に、誰か友人の学者が、それなら既に先達がいる、と云って教えてくれたのだっだろう。

私たちは博士の論文を読み、私たちよりも網羅的にわが古典のなかに(特に古代の長歌の中などに)定型を模索していることに興

がった。又、实例として盛んに出てくるラテン詩、特にイタリア詩の分析は、当時、ローマやイタリアの詩に凝っていた私や福永を喜ばせた。しかし技術的な面では、博士から教わる個所はなかった。

既に私たちは数人が協同して、恐らく博士に比べて問題にならないほどの多くの時間を、実験のために捧げており、音綴数や韻の深さという問題などについても、日本の現代語の現場で無数の試行錯誤の後、段々最も有効な形が見えて来はじめていたのである。(脚韻は二重韻が、最適、又、抱擁韻においては、屢々拡充二重韻を採用、という私たちの結論は、九鬼博士のそれと大体一致している。恐らくこれは誰が試みても、同じ結果に到達するだろうから、その音価には客観性がある、と云えよう。音綴数に至っては、博士の試みはあまりにも古典的な、文語の調子を利用するあまり、口当りがよすぎるように感じられた。私たちは、もっと近代的な苦渋がリズムのなかに感じられる、ボードレールの散文主義やマラルメの晦渋主義にあこがれていたのである。日本語の押韻の問題は、結局、音綴数の問題に帰着する。何音ごとに同じ音が繰り返されれば、耳にそれが韻として有効に響くかということ。一行の音綴が少なすぎれば、単純な意味をしか盛れないために小唄のごとくになり、音綴が多すぎれば、韻は響かなくなる。最近、短歌を並べて、脚韻を踏ませている試みを見たが、目の愉しみとしては兎に角、音の響き合いと云う点では、同音の出現が遠すぎて問題にならなかった。随分、苦労知らずの勇者が現れたものだ、と、苦笑した。私たちの結論は、日本語の詩の一行の音綴数は、中国詩の七言、フランス詩のアレクサンドラン、十二音

に相等するものが、俳句などと同じ十七音だろうか、それとももう少し緊密な十五音だろうかというところのあたりで、わずかに揺れていた。福永は十五音綴、私は十七音綴、そしてより若い同人たちは、その両方の間で試作を行って、効果をためしていた。)とここで、私たちの押韻定型詩が公表されはじめると、それを否定するために、もう一度、九鬼博士の押韻論が読み直され、そして、私たちの実作がだめであることよって、博士の議論も空論であることが証明されるという論理が、流行しはじめるに至った。

これは博士には、飛んだ迷惑を掛けることになったわけであるが、また一方で、私たちの方向へも、日本語で押韻をすることの無意味さは、九鬼博士の作詩の実例によって既に充分、曝露されているのではないか。君たちも、まさかあの博士の試作を詩として本気で認めているのではあるまいに、という声が繰り返し浴せられた。

正直のところ、当時の私たちは、博士の詩については、鷗外や上田敏やのものと同様の学者の手すさびであって、微笑をもって読みすぎせばいいので、正面切って詩か非詩かと迫るのは、大人気ないと思っていた。学者の作る詩というものは、奇妙に清朗快活で透明であり、そして語彙が歴史的記憶にまといつかれすぎていて、感覚の獨創性に乏しい。その上、わが国の詩人は、伝統的に幽暗の趣きを尊ぶところがあって、鷗外Ⅱ九鬼式の澄明なアポロンの詩境はそれらしく感じられるのである。

近代の日本の詩人は、英国のローマン派に次いで、フランス象徴派に学んだ。特にその行きつく先であったマラルメの十四行詩

などに比べれば、博士の作品は明快な散文の論理に支配されており、語の配列の点だけでも詩とは申しかねた。

しかし、西欧においても詩天の星の座は、徐々に移動を開始し、十九世紀以来長く詩的不毛の時期と見られていた、フランス十七、八世紀の詩が新たに注目を受けるようになって来た。戦前から秘かに、あの古典主義時代の理性的な詩の面白さに捉えられていた私には、それは気持のいい評価の移動であったのだが、その新しい古典主義的な詩的趣味から読み返してみると、博士の詩もそうした風潮に一脈通じるものがあって、別趣の面白味が感じられるようになって来た。

そこで私は気付いたのだが、私があればフランス古典主義時代の理性詩に興味を惹かれる契機となったのは、ヴァレリーの詩からであり、そしてラテン詩に学んだヴァレリーの技法が、フランス十七、八世紀の詩人たちの擬古典主義の詩法と呼応するのである。そうして、恐らく博士がパリで日本詩の押韻について思いを深める動機となったのは、やはり当時、突然に詩壇に捲き起った「純粹詩論争」の渦中にあったヴァレリーの作品に接したことからであったに相違ない。

そしてヴァレリーのラテン詩的詩学と、博士の論理的結核の結合が、あのような当時の日本の詩壇の趣味とは全く懸絶した、*Other*で、*Dissonant*な表現の詩を作るに至らせたのであろう。もし、当時のパリ詩壇の中心勢力であったブルトン一派の超現実主義の作品を、詩の本流と認めたのだったら、博士の押韻論は成立の根拠を失っただろう。

(尚、最近、京都から原田昌雄の詩集『誘引』が刊行された。

二部に分れ、Iは九鬼博士の「作例」三十九篇に、IIは私の「極みの時」十篇に、いずれも次韻をした、定型押韻詩集である。博士が在世ならば喜んで珍重されたであろう。

九鬼哲学のもつ今日的意義

下 店 栄 一

極東の、そのまた東の離れ島という僻地性。その負い目を、世界の先進諸文化に対して日本は歴史的にもって来た。すでに世界の先進諸文化が中世に入っているのに、まだ古代に留まる——勿論、縄文土器という造形的に非常に秀れた作品を産出したというような例外はある——という風に、日本は文化の跛行性を常に脱することが出来ないで来たのである。

そしてこの事実知らぬ顔の半兵衛をきめ込むことが出来なかった、というのも日本文化の宿命だった。全く幸か不幸か、お隣りの先進文化と自分のそれとの懸隔があまりにもはつきりと分る程度だったので——とてつもなくかけへだたっているとそれはわからないし、問題にならないし——、とにかく一所懸命、進んでいるところを取り入れた。その落差をなくそうとしているうちに、向うの方が停滞したりして、何とか追いつくことが出来た——というような繰り返しで、我々は自分自身の文化遺産を歴史的に伝承する慣わしを自覚的につくり出すことに失敗しつづけてきたようだ。

今日でも、翻訳や、物真似が、むしろ独創的な仕事よりも、学

問的業績や文化的営為として少なからず評価されるのはこの僻地性と文化の跛行性による。もうそろそろこういう風潮に、終止符を打つべきではないか。世界の文化の流れの中で、学問や芸術上の仕事はどう位置づけられるか（日本からみた「世界」ではなくて、そういう態度そのものを括弧に入れて、というパスベクティヴにおいて、自分の仕事もひとの仕事も、批判的に評価することが出来るし、またやらねばならない、そういう時代に我々は今生きていることを自覚すべきだと思う。

全集とか著作集の刊行も、またそれを受けとめる我々も、このような視点から考え直してみなければなるまい。『九鬼周造全集』の刊行は、我々の先達の業績をどう評価し、またどう継承し、さらには如何に我々の課題の形成に意義をもたせうるかを考える上で、大変時宜にかなったできごとだと思う。

九鬼周造の業績はその評価が色々な面から可能である程豊かであり、芸術、とりわけ文学に、また宗教にも、「目のみえた」ひとであった。しかし、その重点はやはり哲学にあり、自からもそう記し、またその残された業績の中でも、「偶然論」がその一番中心の主題であった。ここでも、だから、「偶然論」に焦点を絞って考えていこうと思う。

九鬼周造の哲学する態度、その方法、その問題設定・立脚地、その思索の見通し等すべてを通じて、ひとことで特徴づけると、いつも「中間的」であり、今日の我々のパスベクティヴからみると「過渡的」であった、といっているのではないかと思う。

一方では、九鬼は大変日本的なひとであり、また自覚的に「日本人」という思索の原点から」のみ本来的に哲学しようとした数少

い哲学者のひとりであった。それは「いき」や「風流」の解明のみならず、「偶然性への問い」の攻究にも明らかにみる事が出来る。

他方、西欧の哲学の広義の方法をマスターして、自分の問題を哲学した。このことは『いき』の構造や『偶然性の問題』のアプローチに明瞭に認める事が出来る。西欧の哲学の歴史の伝統についても、その全体にわたって極めてすぐれた理解と同意を示し、理性を原理とした論理と体系(概念分析による区別と連関づけ)に哲学の学問性(九鬼の言葉では「哲学の形式」)を見出した。

しかしもう一方では、非合理をも含む、あるがままの現実、すなわち合理—非合理といった対立や知情意等の区別に先立つ豊かな具体的体験に目を開き、それを「哲学の内容」と呼んで、具体的存在の総体を根源的に理解することを哲学の課題(哲学は存在論でなければならぬ)と考えた。そして、西欧の一九一—二〇世紀に出現する反合理主義の哲学に深い共感を示し、ベルクソンに結実するフランス哲学の反合理主義、理性批判をよく解し、またドイツの理性原理の批判、克服を目指すハイデッガーに至る思想の流れにも、日本人という思索の原点から哲学する自分の立場の形成を触発され、それとの重なり合いに自分の将来の哲学の見出しを見出したという事が出来る。

また、現に生きる、具体的実存者の個性的な実存性においてなされる存在理解に哲学の尽きない生命をみつ、他方では何等かの意味で合理主義でない哲学はあり得ない、と九鬼はいう。

一方では、哲学が理論的認識として認識の主体と客体の分離対立を予想することを認め、アリストテレスにはじまる実体—属性

の存在論理学という、ロゴスを原理とする同一性の形而上学の根本前提を踏襲しながら、同時に哲学は個性の体験から生れ、個性を最も完全に生かすことによって最大の客観的認識に達しうると九鬼は主張する。

このようにして、体験の具体的現実の豊かさに対して、概念分析の限界は勿論九鬼によって自覚されていて、両者の間には超えることの出来ない間隙があり、その不可通約的な不盡性を意識しつつも、なおその論理的表現の顕勢化を「課題」として「無窮」に追求するところに学の意義がある、という。

たしかに「偶然性」の主題化は、日本人としての思索の原点から出発してはじめて可能であった。その原体験も、具体的な諸体験も、その記述・分析にあたって九鬼によって見つめられていた事態もまた、そうであったといつてよい。彼独自の直観によるものであった。

様相(論理様相、あるいは存在様相)についても、アリストテレス的存在論理学に基づくかぎり同じである)はこの西欧的存在論においては本来的にオペラティヴな概念であり、「……とは何か?」という問い方では主題化されえず、とりわけ「偶然」は理性原理の立場では、言葉はあっても無きに等しいか、あるいは無意味なものともみなされざるをえない。この事態を考慮するとき、九鬼のその問いへの着目と、主題化が並々ならぬものであることがよく理解される。

しかし、九鬼のその問いへのアプローチ、分析の仕方、体系づけ、分析に使われた諸概念は、アリストテレス以来の理性を原理とする実体—属性を予想する同一性の形而上学のそれであった。

そのために九鬼のユニークな試みも、この限りではいわば必然性の「影」という印象を拭い去ることは出来ない。神川正彦氏のいう「必然性絶対優位」の立場というのも、この意味に於いてである。

それ故にこそ、今まで無きに等しい偶然性という様相を、他の三つの様相(必然性、可能性、不可能性)に還元したり、可能性の同義語の一つとするのではなく、独自の、他の三様相と等しく意義のある、そしてそれらとは *Quadratum logicum cum modo* によって連関づけられる(それ故に、その限りの、すなわち必然性と矛盾対当にある限りの偶然として)、四様相の一つとして確立したばかりでなく、時間との連関において、偶然性を現在という次元でもって(可能性が未来に、必然性が過去により)説明すること、現実存在を現実存在として顕わにする様相こそ偶然性であることをあきらかにしたことは、九鬼の二〇世紀哲学への最も重要な貢献といえる。

だが、以上の指摘でも分るように、九鬼の「中間的」であることは九鬼の思惟の徹底性(ラディカル)の欠如を意味する。中間的であること、二面の乖離の克服を哲学をこえた「実践」にゆだねる九鬼の結論は、哲学的思惟を西欧の伝統的なロゴスの思弁に限定する安易さではないか。

現実²に今存在するものの存在が無においてあるという問題性、歴史の一回性、と同時に事実の無窮性、具体的個(多)についてもよい)の非可制約性、そしてまたハイデッガーが最も根本的な形而上学の問いと呼んだ「そもそも存在するものがあって、無がないのは何故か」という問いを問うことを可能にする根拠こそ、哲

学の Grundstimmung としての驚きをもつ、より根源的な偶然性ではないか。

それは「無」、「無限」、「悪」、「混沌」、「多」等と共に、今迄の西欧の哲学の伝統を支えて来た土台を、いつもゆるがし、危うくして、西欧の形而上学をおびやかしつづけて来た現実の契機なのである。

二〇世紀の西欧の哲学自身の最大の課題とその血みどろの努力は、これらの問題に多かれ少なかれ関わって、自己の歴史と伝統の全体を括弧に入れて、その根源にまでさかのぼり、そのオペラティヴな地平そのものが自からあらわに提示するより根源的な問題化の地平の開かれてくるあくことなき思惟の徹底性の闘いだといつてよい。

それを九鬼は理解することはなかった。彼は時代的にも、思想的にも「過渡的」な哲学者であった。しかし、以上のような極めて重大な示唆と教訓を我々に残して行ったことを、我々は今日ではじめて深く覚知出来るのである。

(カリフォルニア州立大学教授)

九鬼教授の想い出

アダ・レーヴィット

亡夫カール・レーヴィットが九鬼周造教授を識ったのは、一九二〇年代の終り頃のマールブルクにおいてでありました。当時のマールブルク大学には、『存在と時間』を上梓して間もない若い

マルチン・ハイデッガーが教鞭をとっており、哲学の学生の絶大な人気を博しておりました。彼の興味深い講義を聞こうと、多くの日本人もマールブルクを訪れてきました。しかし、ハイデッガー独特の難解な哲学用語を理解することは、とりわけ外国人留学生には並大抵のことではなく、そこで主人が九鬼教授のハイデッガー哲学の理解に助力をする役割を果たすことになった次第です。ハイデッガーはその後フライブルク大学の教授となり、九鬼教授は日本へ帰られ、レーヴィットはマールブルクで教授資格を得たのですが、その後は文通も途絶えがちになってしまいました。

ナチズムがドイツを席捲し始めた一九三四年の初め、レーヴィットは人種的理由からドイツの大学での研究生生活を断念せざるを得なくなり、新天地をもとめて国外移住を余儀なくされました。私も夫婦は三年間をローマでつつましく生活しましたが、そこでの主人の研究をささえたのはアメリカの僅かばかりの奨学金でした。主人はこの様な窮状からの脱出をはかって、各方面の知人や研究所にあてて就職依頼の手紙を書きましたが、望みは見えそうにありませんでした。そういうある日のこと、九鬼教授から一通の手紙が届き、仙台の東北帝国大学の客員教授に推薦したい旨の内容でありました。それはかつて『弓と禪』の著書によって知られたオイゲン・ヘリゲルのおられた由緒あるポストでした。私どもはこの推薦を躊躇なく受け入れることにしましたが、それはただ、経済的理由や就職の困難という理由からだけではなく、日本という全く新しい未知の世界とその優れた文化に接したいという念願からでもありました。私どもはナポリから日本郵船

の諏訪丸に乗船、五週間の船旅ののち神戸に到着、そこで東北大学の河野與一氏のあたたかい出迎えをうけました。

私どもは仙台に向うまえに、先ず京都に九鬼教授を訪問、教授の手厚い歓迎をうけました。また東京では九鬼夫人とご立派な二人のご子息にもお目にかかりましたが、特に忘れ難いのは、九鬼夫人が私を三越百貨店に案内して下さり、仙台の生活に必要ないろいろな生活道具の買物の助けをして下さったことです。

私どもはそれからの五年間を仙台で過しましたが、その間、九鬼教授をはじめ大学の同僚や関係者との交友を通じ、また多くの忘れ難い旅行によって日本の土地と人柄について多くの大切なことを学びました。しかし、日独伊樞軸の協定が結ばれナチスの圧力が日本にも及んできた一九四一年、私どもは再びこの国からも追放されることになりました。

滞日五年の間に、私どもは度々九鬼教授にお目にかかる機会を得ましたが、それは大抵京都の閑静な、小庭園と鯉の泳ぐ池のある純日本式のお邸においてでした。どの部屋にも書架一ぱいの蔵書が並んでいて、日本式の構造の家屋がその重みで壊れはしないかと一寸心配したほどでした。訪問の度に懇ろな歓待を受けたほか、流暢なドイツ語を喋られた先生との対話はいつも有益で楽しいものでした。この新しい土地での生活に必要な多くのことを学び大切な助言を頂きました。私はいまでも九鬼教授の細面の美しい風貌、上品な物腰やもの静かな話し振りを、はっきりと覚えています。お顔にときどき皮肉っぽい微笑の浮ぶこともありました。私は日本での五年間が色々な意味で私どもの生涯で忘れられることのできない幸福な歲月であったのは、ひとえに彼の友情のお蔭で

あつたと信じています。それだけに九鬼教授の早世は私どもにとり大きな悲しみでした。私の主人も一九七三年に亡くなりましたが、今生きていて、今回の『九鬼周造全集』の刊行に際して、彼自身の言葉で感謝の想い出と旧友への敬愛の一文を草しえないことを心から残念に思うものです。

(佐藤明雄訳)

〔資料〕

『京都日日新聞』昭和十一(一九三六)年十二月七日号

追放された哲学者に贈る涙の国際友情

義侠の主、京大九鬼博士

(前略)哲学者ドイツフライブルヒ大学のハイデッガー教授の高弟カール・レーウィット氏が先月十五日来朝し東北帝大哲学科の講師として着任したが、この裏には次のような国際佳話秘められてあつたことが漸くこの程になつて明るみに出され、男の友情として持て囃されてゐる。

感激の再会よ

東北帝大の講師として来朝したレーウィット氏

京大文学部哲学科教授九鬼周造博士は滞欧中一九二七年にドイツのマールブルヒ大学へ行き当時同大学の教授であつたハイデッガー博士の許で研究した、そしてその時同じようにハイデッガーの許で勉強してゐたレーウィット氏と識り合ひ、一年余机を並べて研究を続けた後、九鬼博士はフランスへ戻り間もなく帰朝したが、両氏の間には文通が続けられてゐた、レーウィット氏はその後マールブルヒ大学の講師に就任したが、間もなくナチスが政権

を握るに及んでユダヤ人迫害が始まつた

レーウィット氏はユダヤ系であつたが、欧州大戦に従軍したといふ理由でしばらく猶予されたものの、遂に一昨年講壇から追放されたので止むなくロックフェラーの奨学資金によりローマへ赴き伊太利の哲学史を研究してゐたが、奨学資金の交附期限も間もなく切れるので「日本で働けないだらうか」と昨年秋九鬼博士の許へ就職口を依頼して来た

博士は大いに同情して八方奔走した結果、東北帝大に迎へることに決定したので、その旨を打電するやレーウィット氏は大喜びで取るものも取りあへず夫人を同伴ローマを出発して先月十五日朝神戸へ上陸した、九鬼博士は埠頭まで出迎へて夫妻を伴つて入浴、高雄やその他を案内して都ホテルへ投宿させて翌日京都駅まで見送つたが夫妻の眸は感謝の涙に光つてゐたといふ

九鬼博士を南禅寺の自邸に訪れると次の如く語つた

レーウィット君はヘーゲル以後の哲学者特にフオイエルバツハ、キールケゴール、ニイチエ等を背景として自分の哲学を發展させつつある人で、社会学にも造詣の深い人です、著書には「社会における個性の研究」「ニイチエの永劫回帰」「ブルツクハルト」等がありハイデッガーの最高の弟子ですが講義の内容が悪いといふのでなく、唯ユダヤ系であるといふだけで追はれるのですからほんとに気の毒です、しかしうまい所があつて幸ひでした

編集室より

次回配本は、第六巻「西洋近世哲学史稿 上」(定価四二〇〇円)を五月一九日にお届けいたします。